

# Lenfilm Retrospective

レンフィルム祭 — 映画の共和国へ



enfilm  
Retrospective



レンフィルム祭

——映画の共和国へ

1992年 6月20日(土)／21日(日) 有楽町朝日ホール(千代田区有楽町2-5-1有楽町マリオン11F)  
7月4日(土)→8月2日(日) 毎週金、土、日曜 川崎市市民ミュージアム(川崎市中原区等々力3049-1)

主催——川崎市市民ミュージアム、国際交流基金、朝日新聞社、(財)大阪国際交流センター

特別協力——レンフィルム

後援——外務省

協賛——サントリー株式会社

協力—— FINNAIR、株式会社日本海

問い合わせ——☎044-754-4500 川崎市市民ミュージアム

# 合言葉は「レンフィルム」!

より多くの戦慄と大胆さと奇跡に立ち会うために

蓮實 重彦

「レンフィルム」は合言葉だ。何にもまして、人を戦慄へと誘う甘美な合言葉なのである。試みにその一語を口にしてみるがよい。「レンフィルム」と低くつぶやいただけで、誰もがたちどころに、70 数年に及ぶ映画史の最も貴重な瞬間に身を震わせて立ち会うことになるだろう。

実際、1918年に設立されたこの撮影所は、FEKSの活動に代表される無声期以来、トーキー初期に第1回モスクワ映画祭でのグランプリを独占し、ハリウッドに対するニューヨーク派にも似た聡明なスタンスで、公式な表情をまとうモスクフィルムへの距離を維持してきた。戦中から冷戦期の決して短くはない困難な時期をも耐えながら、やがて世界が目にするだろう瞬間の到来をじっと待ち続けていたのである。そして、その瞬間は訪れた。事実、1985年の民主化の翌朝から、カンヌが、ベルリンが、ロカルノが、ロッテルダムが、レニングラード派とも呼ぶべき作家たちの勇気と斬新さに戦慄したのであり、いま、その戦慄が日本に上陸しようとしている。

「レンフィルム」は、また、多様に偏心する大胆さへと人を導く合言葉でもあるだろう。事実、ソ連映画は暗くて教訓的だという固定したイメージを晴れやかに払拭し、パラジャーノフやタルコフスキーが決して例外ではなかったことを世界に向けて雄弁に表明しているのが、現代のレニングラード派の作家たちなのだ。投獄経験8年という56歳の「新人」カネフスキー、ロシアのサミュエル・フラーともいべき孤高の活劇派アラノヴィッチ、夭折した感性豊かな女流作家アサーノワなどの傑作が、形式の冒険者ロゴシュキンや神秘主義者ロプシヤンスキーの野心的な試みとともに一挙公開され、それに、世界的な重鎮ゲルマンや国際映画祭の寵児ともいべき若いソクーロフの代表作までが上映される時、そこに出現するだろうものは、流派的結束を超えた誇らしげな大胆さであるはずだ。鮮やかな色彩と深いモノクロームのコントラスト、フィクションとドキュメンタリーの意表をついた対位法、文学的な発想と映画的な題材処理の大胆なコントラスト、少年たちの失意と大人たちの諦念との痛ましい行き違いなどが、「レンフィルム」の煽りたてる刺激のたぐい稀な大胆さをあらゆる人に納得させるだろう。

「レンフィルム」は、さらに、人を映画史的奇跡に立ち合わせしめる貴重な合言葉であることに注目されたい。「スタジオ・システム」はいたるところで崩壊したという映画史の常識にさからい、幾多の改組や再編を体験しつつも、緯度からいって世界の最北端に位置する本格的な撮影所として、ソ連崩壊などものともせず、いまなお旺盛な製作活動を展開しているのだから、「レンフィルム」はMGM だのパラマウントだのといったちやちやな撮影所とはわけが違う。ハリウッドのメジャー系撮影所のように、旧作の権利を売り払ったり、敷地を手放したり、日本企業に身売りしたりすることもなく、また日本のように配給会社に墮したりもせず、創設以来の70年の歴史を生き、しかも新たな体質改善をおのれに課してさいる1992年の「レンフィルム」は、まさしく映画史に一度しかおこらない奇跡を体現している。

戦慄と大胆さと奇跡の合言葉としての「レンフィルム」が、いま、その相貌のほんの一端を垣間見させようとしている。断言しよう。邦画洋画を問わず、近年の映画がおさまりがちな退屈な安定と小心さと繰り返しの支配に誰もがうんざりしているとき、この合言葉は、あらゆる人に思いもかけぬ爽快な体験を約束するだろう。

(はすみげひこ 映画評論家:本企画の上映作品を選定した。)

# timetable

タイム・テーブル

有楽町朝日ホール			
6月20日(土)	10:30 私はスターリンのボディーガードだった	12:30 モスクワ・エレジー、マリア	15:00 七番目の道づれ(監督質疑応答)
プレミア	17:30 動くな、死ね、鞋れ(監督質疑応答)	20:00 最新作上映予定(日本語字幕なし)	
6月21日(日)	10:30 きつつきの頭は痛まない	12:30 トルベド航空隊	14:30 シンボジウムゲルマン(監督)、カネフスキー(監督)カルマリタ(脚本家)、蓮實重彦(映画評論家)
プレミア	17:00 戦争のない20日間	19:00 日蝕の日々	
川崎市市民ミュージアム 映像ホール			
7月4日(土)	13:00 外套(サイレント 日本語解説資料あり)	15:00 りんご売りカーチカ(サイレント サウンド版)	17:30 小犬を連れてた貴婦人
7月5日(日)	13:00 海に出た夏の旅	15:00 トルベド航空隊	17:30 私はスターリンのボディーガードだった
7月10日(金)	16:00 モスクワ・エレジー	18:00 ミュージアム・ヴィジター	
7月11日(土)	13:00 日蝕の日々	15:30 対談ソクーロフ(監督)蓮實重彦(映画評論家)	18:00 最新作上映予定(日本語字幕なし)
7月12日(日)	13:00 ヴィオラソナタ・ジョスタコヴィッチ	15:00 マリア/ノビエト・エレジー/ベテルブルグ・エレジー	17:30 モスクワ・エレジー
7月17日(金)	16:00 私はスターリンのボディーガードだった	18:00 マリア/ノビエト・エレジー/ベテルブルグ・エレジー	
7月18日(土)	13:00 七番目の道づれ	15:00 道中の点検	17:30 戦争のない20日間
7月19日(日)	13:00 わが友イワン・ラブシン	15:00 きつつきの頭は痛まない	17:30 パッツァーニ
7月24日(金)	16:00 愚者の挑戦	18:00 タクシー・ブルース	
7月25日(土)	13:00 護送兵	15:00 動くな、死ね、鞋れ	17:30 ミュージアム・ヴィジター
7月26日(日)	13:00 デビュー	15:00 ハロー・グッドバイ	17:30 愛の告白
7月31日(金)	16:00 七番目の道づれ	18:00 護送兵	
8月1日(土)	13:00 愚者の挑戦	15:00 トルベド航空隊	17:30 パッツァーニ
8月2日(日)	13:00 海に出た夏の旅	15:00 動くな、死ね、鞋れ	17:30 日蝕の日々

各回入れ替え制  
 チケット——— 当日1200円 前売り1000円(首都圏主要プレイガイドにて発売)  
 (消費税込) 5回通しチケット 4000円(首都圏主要プレイガイドにて発売)  
 (前売り) 5回通しチケットは2会場共通でご使用になれます) シンボジウム、対談は入場無料。  
 会場——— 有楽町朝日ホール 東京都千代田区有楽町2-5-1有楽町マリオン11F  
 川崎市市民ミュージアム 川崎市中原区等々力3049-1  
 交通 東急東横線・JR南武線「武蔵小杉」よりバス  
 バス中原行き「市民ミュージアム前」下車/市民ミュージアム行「終点」下車  
 問い合わせ——— ☎044-754-4500 川崎市市民ミュージアム

※プログラムが変わる場合があります。あらかじめご了承下さい。



りんご売りカーチカ

KATKA'S RAINETTE APPLES
KAT'KA BUMAZHNYI RANET
監督=エドゥアルド・ヨハンソン、フリードリヒ・エルムレル
1926年/サウンド版1973年/モノクロ/スタンダード
/サイレント(サウンド版)/74分

田舎娘カーチカは都会に出稼ぎに来て、道端でりんごを売って生計を立てる。やがて男にだまされた身重の彼女の前に宿も職もない気のいい若者が現れ、新しい生活への道を見いだしていく。1920年代のロシアの大都会には人々が溢れ、自由を謳歌する姿が生き生きと映し出される。『魔街』のタイトルで1928年に日本でも公開された。



外套

OVERCOAT
SHINEL
★日本語字幕なし、解説資料付
監督=グリゴリー・コージンツェフ、レオニード・トラウベルグ
1926年/モノクロ/スタンダード/サイレント/93分

1920年代ロシア・アヴァンギャルドで、エイゼンシュテインと並ぶ大きな流れ、レンフィルムの源流でもあるエクセントリック俳優工房(FEKS)の代表作。ゴーゴリの小説を原作とし、表現主義的な特徴ある視覚的スタイルをもった作品。今回、特にフィルムをミュンヘン市立映画博物館から借用。大阪、川崎で各1回の上映。



小犬を連れて貴婦人

THE LADY WITH A DOG
DAMA S SOBACHKOI
監督・脚本=イオシフ・ヘイフィッツ
1960年/モノクロ/スタンダード/90分

チャーホフの生誕100周年記念に、彼の短編小説の簡潔で繊細な文学世界を見事に映画化した。19世紀末、避暑地での、グロフ(アレクセイ・バターロフ)と上品な美しさを湛えるアンナ(イヤ・サーヴィナ)との出会い。お互い、既婚の身でありながら心引かれてゆく。ヘイフィッツは1928年の『鉄の歌』以来現在まで現役で活躍中。



七番目の道づれ

THE SEVENTH SATELLITE
SEDMOI SPUTNIK
監督=グリゴリー・アローノフ、アレクセイ・ゲルマン
1967年/モノクロ/ワイド/83分

レンフィルムの巨匠ゲルマンの第一作。ボリス・ラヴレニョーフの同名小説を力強く鮮烈なタッチで描いた。1918年、革命直後のペトログラード。法学教授アダモフは革命へ身を投じ、歴史の大きな流れに翻弄されながらも、自分を偽ることなく生き抜いた。主演の名優アンドレイ・ポポフの威厳を秘めた演技がすばらしい。



デビュー

THE DEBUTS
NACHALO
監督=グレース・パンフィーロフ
1970年/モノクロ/ワイド/90分

ドライヤー、ブレッソン、ロッセリーニ。多くの映画作家が描いたジャンヌ・ダルク。パンフィーロフは、若い娘がジャンヌ・ダルク役で映画デビューするまでを描き、そうそうたるジャンヌ・ダルク映画史にちょっと風変わりな1ページを加えた。劇中劇の厳格な演出場面と、恋するヒロインのメロドラマ風な日常との落差が魅力的。



道中の点検

TRIAL ON THE ROAD
PROVERKA NA DOROGAKH
監督=アレクセイ・ゲルマン
1971年/公開1986年/モノクロ/ワイド/97分

33歳のゲルマンが新進の監督としてひとり立ちして完成した第一作。しかし、ベレストロイカによりようやく15年後に公開され、ソビエト映画界の新しい動きの先駆けとなった。ナチスと戦うバルチザンの前にドイツの軍服を着て投降してきた男。彼は敵か味方か、リアリズムに徹した奇酷な戦争の描写が端正な美しささえ生み出す。



ハロー・グッドバイ

HELLO AND GOODBYE
ZDRAVSTVUI I PROSCHAI
監督=ヴィターリー・メリニコフ
1972年/カラー/スタンダード/95分

三人の子供を抱えコルホーズで働くアレクサンドラのもとに、サーカスの女と蒸発したはずの夫が突然帰ってくる。夜中に忍び込んでくる夫をアレクサンドラは叩きのめし、そこに新任の警察官がやってくる。コルホーズで働く人々の愛と喜怒哀楽を活写した作品。監督のメリニコフはレンフィルムの70年代黄金期を代表するヒットメーカー。



きつつきの頭は痛まない

WOODPECKER'S HEAD DOES NOT ACHE
NE BOLIT GOLOVA U DYATLA
監督=ディナーラ・アサーノワ
1974年/カラー/ワイド/73分

音楽に夢中になった少年の自分の夢への確信、そして初恋。子どもたちのなげない仕草を新鮮な感覚で描いた愉快で少し悲しい物語。古い屋敷の大きな門が軋る音に、メロディーを聴き取るシーンなど、レンフィルムの培った良質なメロドラマの伝統を受け継ぎながら、女性監督アサーノワのしなやかなまなざしが、いつまでも心に残る。



マリヤ

MARIA
MARIYA
監督=アレクサンドル・ソクーロフ
1975~88年/モノクロ・カラー/スタンダード/40分

1975年にソクーロフは農婦マリヤとその家族をフィルムに記録した。農作業の合間、大きなガラス瓶の水を飲むマリヤ。死んだ息子の墓の前で涙するマリヤ。このソクーロフ処女作のあらゆるショットは、牧歌的な光景の中で輝いている。それから10数年後、マリヤは急死した。これは農婦マリヤへの追悼であり、厳格な運命の記録である。



戦争のない20日間

TWENTY DAYS WITHOUT WAR
DVADTSAT DNEI BEZ VOINY
監督=アレクセイ・ゲルマン
1976年/モノクロ/ワイド/102分

1971年『道中の点検』公開禁止の後、不遇におかれたゲルマンが、原作者コンスタンチン・シーモノフらの支援を得て完成した作品。第二次大戦中、戦線を一時的に離れ、タシケントを訪れた従軍記者の20日間を描く。ゲルマンの徹底したリアリズムはより日常凝視への志向性を強め、表現にも自在さが加わる。ジョルジュ・サドゥール賞受賞。



愛の告白

DECLARATION OF LOVE
OB'YASNENIE V LYUBVI
監督=イリヤ・アヴェルバフ
1978年/カラー/スタンダード/136分

レンフィルムで最も愛された映画監督アヴェルバフの代表作。主人公フィリップは才能あるジャーナリスト。乳のみ子を抱えた若い未亡人に恋をし、結婚するが……今世紀初頭からの揺れ動く時代を背景に、青年時代から老境に到るまで、一人の女を変えず愛し続けた男の物語。E・ガブリエロヴィッチの小説をモチーフとしている。



海に出た夏の旅

SUMMER TRIP TO THE SEA
LETNYAYA POEZDKA K MORYU
監督=セミヨン・アラノヴィッチ
1980年/カラー/スタンダード/88分

1942年、第二次大戦中の夏、遭難した水夫への食糧基地を設置するためにアルハンゲリクからノヴァヤ・ゼムリヤ島に向けて少年探検隊が出発した。孤島の厳しい自然の中での試練、そして敵軍との遭遇など戦時下の夏の彼らの生活を描く。少年やドイツ兵の表情は実にリアルで力強い。海鳥の群れさえも、異様な存在感を持って迫る。



ヴィオラソナタ・ショスタコヴィッチ

SHOSTAKOVICH: VIOLA SONATA
DMITRII SHOSTAKOVICH ALTOVAYA SONATA
監督=セミヨン・アラノヴィッチ、アレクサンドル・ソクーロフ
1981年/公開1988年/モノクロ/スタンダード/80分

悲運の作曲家ショスタコヴィッチについてのドキュメンタリー。アラノヴィッチがソクーロフを共同監督として起用した作品で、'88年に解禁になった。タイトルのヴィオラソナタはショスタコヴィッチの遺作となったもの。写真、日記など、様々な資料を使い、体制に服従しながら作曲せざるを得なかった音楽家の最期の日々を描く。



わが友イワン・ラプシン

MY FRIEND IVAN LAPSHIN
MOI DRUG IVAN LAPSHIN
監督=アレクセイ・ゲルマン
1982年/公開1984年/カラー/ヴィスタ/98分

原作は監督の父親、ユーリー・ゲルマン。'82年に完成されたが、公開が禁止されていた。スターリンの粛清前夜の田舎町、男の子の回想によって刑事イワン・ラプシンが殺人鬼を追う姿が描かれる。自由に動き回るカメラによる映像は、荒々しさと、虚無感を際立たせ、サスペンスより不条理劇のような謎めいた印象を与える。



パッツァーニ

TOUGH KIDS
PATSANI
監督=ディナーラ・アサーノワ
1983年/カラー/スタンダード/97分

アサーノワ、晩年の代表作。パッツァーニとはロシア語で悪ガキのこと。アントーノフは夏休みのスポーツ合宿で、手に負えない「悪ガキ」たちをキャンプに集めた。実際に取材し、少年の屈折した生活が瑞々しい感覚で描かれている。ベレストロイカの直前の作品で、中央の意向で改訂を余儀なくされ、アサーノワの死後国家賞を受賞。



トルペド航空隊

TORPEDO PLANES
TORPEDONOSTSY
監督=セミヨン・アラノヴィッチ
1983年/カラー/スタンダード/95分

航空隊員から映画監督へ転身したアラノヴィッチ。大戦下、厳寒の北極圏での海軍突撃航空隊の壮絶な戦いを描き、戦争世代へのレクイエムとした。敵艦へと突っ込む戦闘機の中から外へと目まぐるしく転換するショットの連続をはじめ、見る者を引き込む強力な演出や、的確で活劇的なカッチングが冴える。ソ連邦国家賞受賞。



モスクワ・エレジー

MOSCOW ELEGY
MOSKOVSKAYA ELEGIYA
監督=アレクサンドル・ソクーロフ
1987年/公開1988年/モノクロ・カラー/スタンダード/88分

'86年12月タルコフスキー、パリで客死。これは彼により映画へと導かれ、その後継者として新たな世界を開くソクーロフが捧げたオマージュ。『サクリファイス』などの断片や彼の死を告げるフランスのテレビ・ニュース、役者として映画に出演するタルコフスキーの映像など、独特のリズムで繋がる偉大な映画監督の刻印された時間。

18



## 日蝕の日々

DAYS OF ECLIPSE  
DNI ZATMENIYA

監督=アレクサンドル・ソクーロフ  
1988年/カラー/ワイド/138分

砂漠に点在する家々のはるか上空を過ぎてゆく俯瞰の長回し。カメラは視点を急速に降下し、ついに大地へと突き刺さる。冒頭の驚嘆すべきシーンからソクーロフによる哲学的ファンタジーの陶酔が始まる。ストルガツキー兄弟の小説を翻案し、ペレストロイカで映画製作の制約を解かれたソクーロフがはじめて世界に放った大作。

19



## 私はスターリンのボディガードだった

I WAS A STALIN'S BODYGUARD  
YA SLUZHIL V OKHRANE STALINA

監督=セシオン・アラノヴィッチ  
1989年/カラー/スタンダード/77分

この作品が公開された時、スターリン支持派、反スターリン派、双方が絶賛し、皮肉なセンセーションが巻き起った。説明的なレーションを挟まず、スターリンのボディガードだった男ルイビンへのインタビューとその時代の貴重な映像で構成。子供に教え諭すようにスターリンの思い出を語り、涙さえ流すルイビンに、底知れぬ戦慄が漂う。

20



## ソビエト・エレジー

SOVIET ELEGY  
SOVETSKAYA ELEGIYA

監督=アレクサンドル・ソクーロフ  
1989年/モノクロ/カラー/スタンダード/40分

歴代政治家の写真が何人も消えては映し出され、やがてカメラは、当時一政治家にすぎないエリツィンを追う。質素な自宅でゴルバチョフの演説をテレビで見ながら考え込むエリツィン。そして、台所で苦悩する彼の顔を冷酷な長回しが捉える。現在を予言したような奇蹟的な記録映画。オーバーハウゼン国際短編映画祭グランプリ。

21



## ペテルブルグ・エレジー

PETERSBURG ELEGY  
PETERBURGSKAYA ELEGIYA

監督=アレクサンドル・ソクーロフ  
1989年/モノクロ/カラー/スタンダード/40分

世界的な音楽家チャリアピンの名誉回復を機に制作されたドキュメンタリー。ヨーロッパ各地に離散していた彼の子どもたちが、今では記念館になったペテルブルグの旧家に戻った。この街の群衆をキー・イメージに、ニュース映画、写真、舞台の記録などを巧みに編集しながら、チャリアピンの生涯が語られる。『エレジー』(86)の続編。

22



## 動くな、死ぬ、甦れ!

FREEZE, DIE AND REVIVE  
ZAMRI-UMRI-VOSKRESNI!

監督=ヴィターリー・カネフスキー  
1989年/モノクロ/スタンダード/105分

ほぼ40年の間、凍結され続けたカネフスキーの少年時代の記憶。大戦直後、収容所地帯と化した小さな炭鉱都市スーチャンの陰影。日本兵の歌う不思議な旋律、そして、少女ガリーヤの思い出。自分についての映画だけを願い、53歳で完成した初の長編作品の中に、彼の凝縮され澄みきったイメージが甦る。カンヌ映画祭最優秀新人賞受賞。

23



## 護送兵

THE GUARD  
KARAU

監督=アレクサンドル・ロゴシュキン  
1989年/モノクロ/カラー/スタンダード/96分

青年兵士たちは、囚人を護送するため列車へと乗り込む。単調だが絶えず緊張を強いられる列車の生活。彼ら兵士の間には、暗黙の厳しいヒエラルキーが存在した。それまで描かれることのない軍隊の暗部を、はじめて暴いた問題作。新しい映画表現を示す作品としてベルリン映画祭でアルフレート・パウアー賞などを受賞。

24



## ミュージアム・ヴィジター

MUSEUM VISITOR  
POSETITEL' MUZEYA

監督=コンスタンチン・ロプジャンスキー  
1989年/カラー/スタンダード/135分

長編デビュー作『死者からの手紙』(86年)に続き、ロプジャンスキーは核戦後の近未来を描いた。男は核汚染の村を訪ね、ミュージアムと呼ばれる場所へと行こうとするが、村人は誰も彼をそこに近づけようしない。しかし、ある日彼は少女によってミュージアムへと導かれ、地球破壊を続ける人類に将来の地球の姿を見せ、警告する。

25



## タクシー・ブルース

TAXI BLUES  
TAKSI-BLYUZ

監督=ハーヴェル・ルンギン  
1990年/カラー/ヴィスタ/110分

西側のスタイルに「毒され」つつある大都会モスクワ。タクシー運転手は、その西側の代表みたいな呑みだくれジャズ・ミュージシャンにタクシー代を踏み倒される。そこで彼はミュージシャンを捕まえ労働者として「矯正」しようと奮闘するが……。ルンギンはフランスとの合作で監督デビューし、'90年カンヌ映画祭監督賞を受賞した。

26



## 愚者の挑戦

THE FOOL WHO CONQUERED WATER  
LOKH — POVEDITEL' VODI

監督=アルカーディー・ティガイ  
1991年/カラー/スタンダード/83分

主人公は友人と二人でコンピューター・ショップを個人経営する若者。借金の取立てにきた暴力団に友人を惨殺され一人復讐を誓う。時々故障するロシア式ハイテク電子機器を駆使しながら、闇屋の暴力団へ戦いを挑んでいく。今日的素材をテンポよく仕上げたサスペンス映画。ロシアのロック・スター、セルゲイ・クリョーヒンが主演。